

山武町胡摩手台16号墳発掘調査報告書

平成6年度

財団法人 千葉県文化財センター

さんぶ ごまてだい
山武町胡摩手台16号墳発掘調査報告書

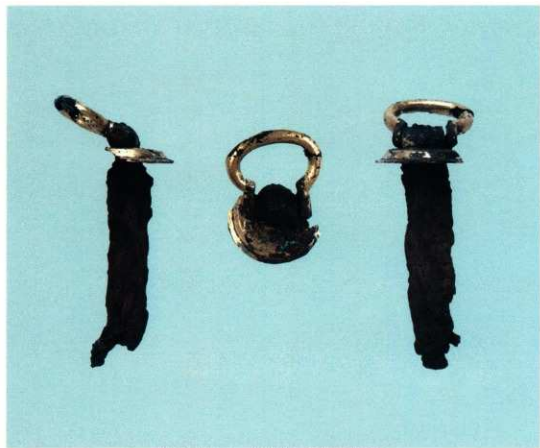


平成6年度

財団法人 千葉県文化財センター



卷頭圖版 1 胡摩手台16号墳横穴式石室



卷頭函版 2 胡摩手台16号填出土鞍金具

序

千葉県は、豊かな自然と恵まれた環境の中で長い歴史が積み重ねられ、全国的にみても埋蔵文化財がきわめて多い地域として知られています。今から千五百年程前の有力者が自分の墓として築いた大小の古墳も、現在までのところ八千基以上確認されており、地域の歴史や文化を知る上で貴重な資料となっています。

ところが、こうした貴重な埋蔵文化財も、宅地開発や道路、ゴルフ場等の建設事業、土砂崩れ等の自然災害により、絶えず消滅の危機に直面しています。

このため、千葉県教育委員会では、昭和55年度から国の補助金を得て、「重要遺跡確認調査」を実施しており、そのひとつとして、県内の主な古墳の中でも、とくに重要性の高いもの、開発等により消滅してしまう恐れのあるものについて、その正確な内容を把握し、今後の埋蔵文化財保護に役立てることを目的として、発掘調査を行ってきました。

今年度は山武郡山武町にある胡摩手台16号墳の発掘調査を実施しました。この古墳は、保存状態の良い美しい前方後円墳ですが、古墳の規模や埋葬施設の内容、古墳の築かれた年代等は不明でした。調査の結果、墳丘のまわりに「周溝」と呼ばれる堀が二重にめぐる大規模な前方後円墳であり、山武郡内でも特筆すべき重要な古墳のひとつであることがわかりました。また、横穴式石室が発見され、埋葬施設の構造や古墳の年代等も明らかになりました。

このたび、調査結果を報告書として刊行することとなりましたが、本書が学術資料としてはもとより、文化財の保護、活用の一助として、広く県民の方々に利用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、文化庁をはじめ、地元山武町教育委員会、土地所有者の皆様など多くの方々に御協力を頂きました。心から感謝申し上げます。

平成7年3月

千葉県教育庁生涯学習部

文化課長 森 成 吉

凡 例

1. 本書は、千葉県山武郡山武町戸田1,526-2他に所在する胡摩手台16号墳（遺跡コード405-012）の発掘調査報告書である。
2. 本事業は、千葉県教育委員会が国庫補助金を受けて行っている県内主要古墳発掘調査の第5年次であり、調査は財団法人千葉県文化財センターに委託して実施した。
3. 発掘調査は平成6年10月3日から同年10月31日までであり、調査面積は200㎡である。整理作業及び報告書作成は平成6年11月1日から同年12月28日までである。
4. 調査、整理作業及び報告書作成は、調査研究部長 西山太郎、成田調査事務所長 矢戸三男の指導のもとに、主任技師 萩原恭一が担当した。
5. 調査の実施に当たっては、山武町教育委員会、土地所有者の麻生一郎・麻生直子・麻生治・斉藤光吉・斉藤昭・川面文男・田村重利の各氏を初め地元の皆様から快く多大の御協力を賜った。記して感謝の意を表する次第です。
6. 発掘調査から報告書作成に至るまで、下記の諸氏から多くの御指導・御協力を得た。

（順不同・敬称略）

大塚初重、杉山晋作、田中新史、白井久美子、萩 悦久、小林清隆、平山誠一、松崎元樹

7. 本書に使用した地形図及び空中写真は以下のとおりである。

第1図 国土地理院発行の1/25,000（成東）。

第2図 千葉県教育委員会『千葉県重要古墳群測量調査報告書—山武地区古墳群(5)—』1993の付図。

第3図 千葉県教育委員会所蔵原図。

図版1 京葉測量株式会社の撮影による航空写真。

目次

序文	
凡例	
I はじめに	1
1. 遺跡の位置と環境	
II 調査の概要	4
1. 調査の目的、方法及び経過	
III 遺構	6
1. 横穴式石室 2. 周溝及び竪穴住居等	
IV 遺物	16
1. Aトレンチ内側周溝出土の金属製品 2. 土器 3. そのほかの遺物	
V まとめ	21
1. 墳丘と周溝 2. 横穴式石室 3. 金属製品	
4. 山武郡内の後期から終末期にかけての主要古墳	

図版目次

巻頭図版1 胡摩手台16号墳横穴式石室

巻頭図版2 胡摩手台16号墳出土榎金具

図版1 胡摩手台16号墳周辺航空写真

図版2 胡摩手台16号墳近景

図版3 胡摩手台16号墳墳丘全景

図版4 横穴式石室

図版5 Aトレンチ全景・Aトレンチ内側周溝・Aトレンチ石室裏込断面
Aトレンチ内側周溝底石材・Aトレンチ内側周溝底鉄刀出土状況・Bトレンチ全景

図版6 Cトレンチ全景・Cトレンチ内側周溝底・Cトレンチ外側周溝

Dトレンチ全景・Dトレンチ内側周溝・Dトレンチ外側周溝

図版7 Eトレンチ全景・Eトレンチ内側周溝・Eトレンチ外側周溝

Fトレンチ全景・Fトレンチ外側周溝・Gトレンチ全景

図版8 Gトレンチ内側周溝底・Gトレンチ外側周溝・Hトレンチ外側周溝

SI 1・SI 2・SI 3

- 図版9 Aトレンチ内側周溝出土金属製品(1)
 図版10 Aトレンチ内側周溝出土金属製品(2)
 図版11 石製品・鉄製品・Dトレンチ出土須恵器

挿 図 目 次

第1図	胡摩手台16号墳と周辺の遺跡位置図	2
第2図	胡摩手台16号墳周辺地形図	3
第3図	トレンチ配置図	5
第4図	横穴式石室実測図	7
第5図	Aトレンチ実測図	9
第6図	Bトレンチ実測図	10
第7図	Cトレンチ実測図	11
第8図	Dトレンチ実測図	12
第9図	Eトレンチ実測図	13
第10図	Fトレンチ実測図	14
第11図	G・Hトレンチ実測図	15
第12図	Aトレンチ内側周溝内出土の金属製品(1)	17
第13図	Aトレンチ内側周溝内出土の金属製品(2)	18
第14図	土器	19
第15図	石製品	20
第16図	鉄製品	20
第17図	墳丘及び周溝復原図	22
第18図	山武郡内後期・終末期主要古墳分布図	27
第19図	山武郡内の後期・終末期古墳主要古墳変遷試案	28

表 目 次

第1表	山武郡内後期・終末期主要古墳一覧	26・27
-----	------------------	-------

I はじめに

1. 遺跡の位置と環境

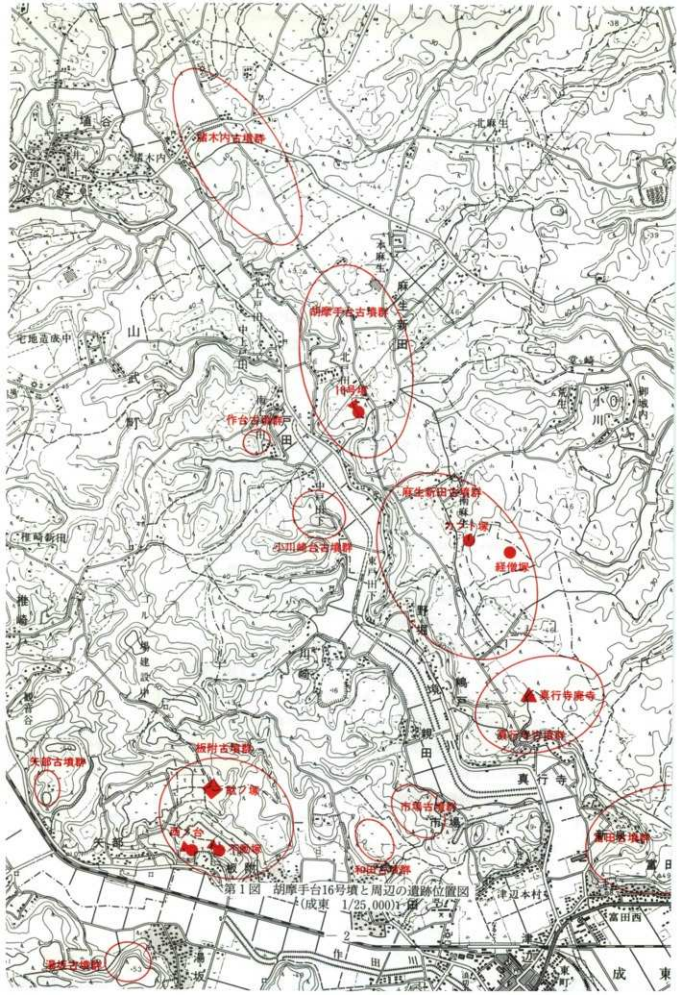
胡摩手台16号墳は山武郡山武町戸田に所在する。本古墳は太平洋に注ぎ込む作田川の支流である境川中流左岸の台地上に築かれている。境川に面した台地縁辺部には、北西から南東に向かって埴谷古墳群・諸木内古墳群・胡摩手台古墳群・根崎古墳群・麻生新田古墳群・真行寺古墳群の諸古墳群がほとんど切れ目なく築かれている。

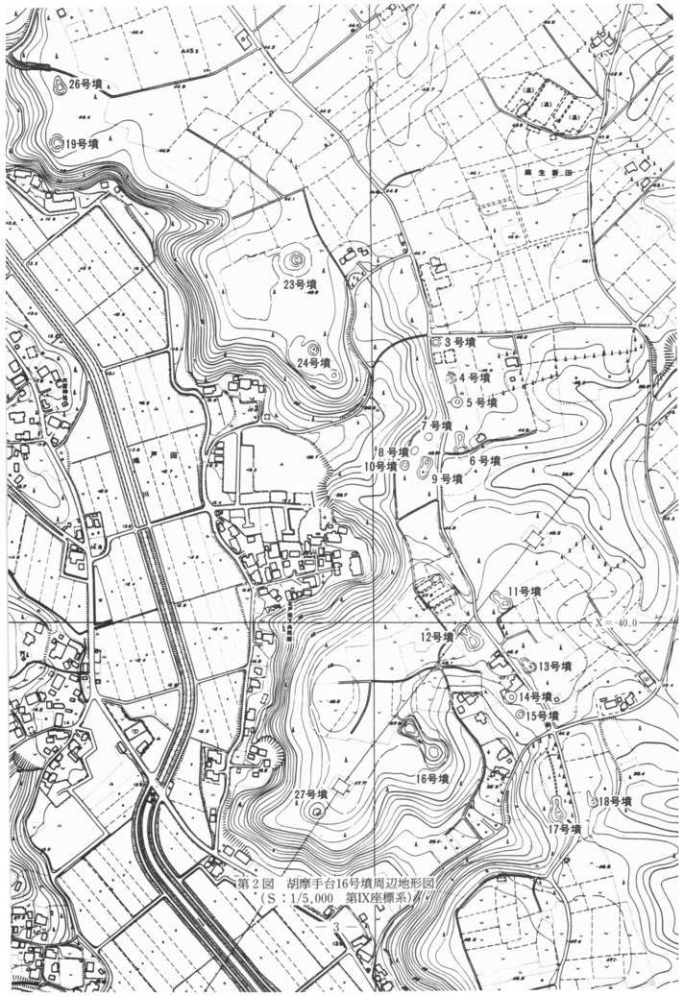
胡摩手台16号墳はこの内の胡摩手台古墳群に属している。平成4年度実施の千葉県教育委員会による測量調査によれば、本古墳群は前方後円墳9基、円墳22基（消滅したもの8基を含む）の計31基によって構成されていたようである。このうち16号墳は境川に向かう小支谷が南東・北西の両方に入り込んで形成された舌状台地の付け根付近に立地している。9基の前方後円墳のうち6基はこの16号墳が面する小支谷を取り囲むように築かれている。本古墳群の前方後円墳には主軸方位に何らかの規制がはたらいていたようで、境川に平行するように南もしくは南東側に後円部、北もしくは北西側に前方部がくるように築造されている。測量調査結果によれば16号墳以外の前方後円墳は墳丘主軸長が30mから40mのものがほとんどで、16号墳はこの段階で79mの墳丘主軸長を測っており、あきらかに主墳的性格の古墳である。全容のわかっていない古墳はまったくないが、9号墳と11号墳の2基の前方後円墳から埴輪が検出されている。

胡摩手台16号墳が築かれている舌状台地上は朝風遺跡と呼ばれる集落遺跡で、当文化財センター刊行の遺跡分布図によれば縄文・古墳後期から平安時代の土器が散布しているとされている。実際に周辺の耕作地を歩いてみると、ほぼ一面に土器破片が散っている。今回のトレンチ調査によって、古墳の周溝調査には不釣り合いなほどの多量の土器破片が出土したが、多くはこの周辺集落遺跡の土器である可能性が高い。

このほかに本古墳の南東側の小支谷対岸台地上で平成6年度現在、当文化財センターが久保谷遺跡を調査している。5・6世紀の集落が中心で、そのほかに2基の円墳周溝跡と1基の円墳、それに中世の墓域が検出されている。また、境川を挟んだ対岸の台地上ではやはり当文化財センターが平成5年度から6年度現在にかけて小川崎台遺跡を調査しており、ここでは3基の円墳と1基の帆立貝形前方後円墳が検出されている。3号墳と呼ばれる6世紀前半築造の帆立貝形前方後円墳には埴輪が巡らされており、円筒埴輪のほかには人物・挂甲武人・馬・鳥・家それに性格のわからない動物形の埴輪が列を形成していた。

なお、今回「胡摩手台16号墳」として報告する本古墳は、地元の人々からは従来「田村稲荷古墳」、「田村塚」、「胡摩手台古墳」などと呼ばれていたようである。





第2图 胡摩手台16号墳周边地形图
(S: 1/5,000 第IX座標系)

II 調査の概要

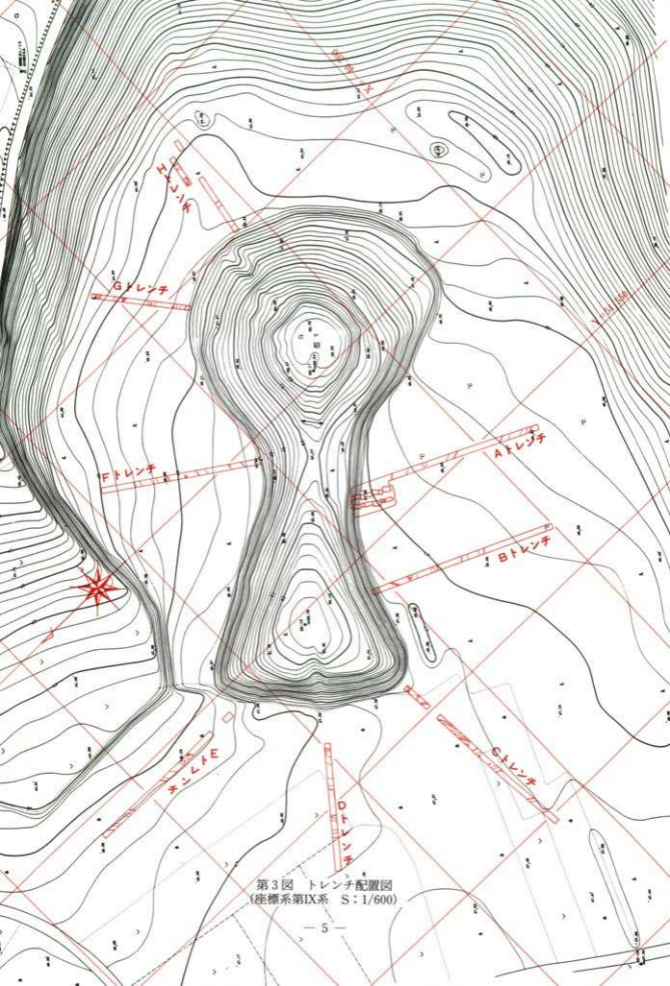
1. 調査の目的、方法及び経過

「田村稻荷古墳」という従来からの呼称からもわかるとおり、本古墳の後円部墳頂には田村稻荷が祭られている。田村とは江戸時代に本古墳の所在する戸田村を知行していた旗本二氏のうちの一族である。田村助太夫の代の元文年間に起きた当村の百姓一揆が原因で、寛保二年に当村における知行高を減封されている。その後近在の住民達が田村氏を稻荷として崇めたようである。後円部墳頂には石の祠が2基あり、古い方の祠には安政二年の銘がある。現在でも地元の人々によって信仰の対象となっている。

今回の調査は周溝の本数、幅、深さ、形態を明確にすることを目的として、古墳の裾部分から放射状に8本の確認トレンチを入れた。このうち、C・D・Eの3トレンチは荒蕪地及び畑地であったために、比較的制約は少なかったのであるが、残りの5トレンチ設定箇所は山武杉の植林域となっていた。このため植林の列の間隔を縫う形での設定となり、調査にとってより有効な部分へのトレンチの設定は当初から断念せざるを得なかった。後円部主軸延長線上へのトレンチの設定は、この部分での植林が列をなさず、さらに密植されているために不可能となり、やむを得ず大きく北寄りの部分に設定した。前方部の周溝コーナー部分を見付けるために設定したC・Eの2本のトレンチのうちCトレンチはあとうずかに南に振ることによってコーナーを出すことができたのであろうが、残念ながらトレンチの南際から植林が始まっており、目的を果たせなかった。Eトレンチは家畜の遺骸を埋葬してあるため、やはりコーナーを出せる部位へのトレンチの設定を諦めざるを得なかった。

このように、多くの制約のもとでのトレンチ設定であったため、本古墳の主体埋葬施設である横穴式石室の検出は、まったく予想外のできごとであった。

横穴式石室の検出は以下のような経過による。Aトレンチ調査の際、墳丘際部分でテラス状の部分を検出された。ここで軟質砂岩と考えられる石材片が検出され、さらに、内側周溝底部付近の墳丘際部分で、鉄鏝・鍬金具が検出された。この二点から考えて、埋葬施設が近くにあるであろうことが想定できたのである。この時点で、調査は日程的に半ばを過ぎていたが、トレンチを拡張して主体部の検出に当たった結果、横穴式石室が姿を現した。確認面における石室平面の記録のみを行って、期間内で調査を終了することができた。



第3図 トレンチ配置図
(座標系第IX系 S:1/600)

III 遺 構

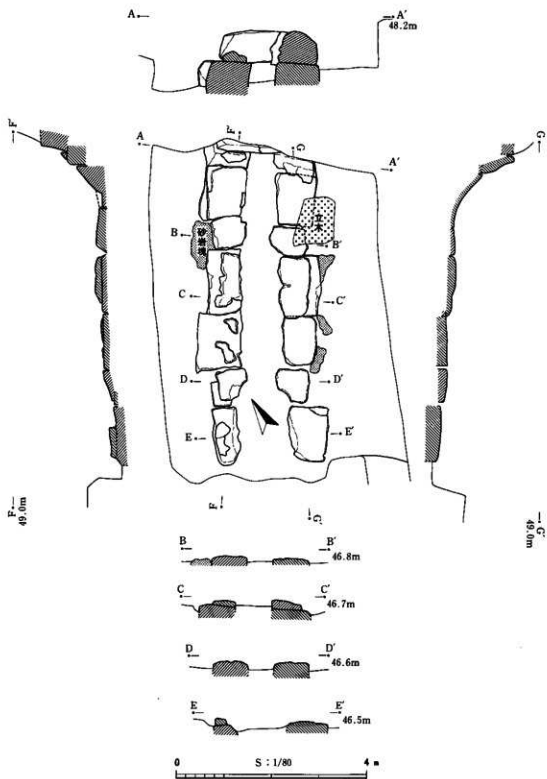
1. 横穴式石室（第4図、巻頭図版1、図版4）

Aトレンチの墳丘裾部分を西側に拡張して検出した遺構である。植林以前は畑地であったために、耕作などによって墳丘がかなり削平され、石室上部の石材が破壊及び搬出の被害を受けている。破壊の時期などについては不明である。

石室裏込め 今回の調査によってその掘り方の境の線を確認することはできなかった。石室調査のためのトレンチ拡張部分は、石室の両側壁外面から外側に約1mづつの広さであるから、掘り方はかなり大きなものであったようである。Aトレンチ土層断面にわずかに裏込め部分の土層断面がかかっている。この部分を見ると、石室確認面から約0.75m程度の深さまで掘り込んで、そこにロームを主体として軟質砂岩ブロックを混入させた層と、黒色土系の層とを互層的に版築状に充填している。

石室用材 石室の用材は軟質砂岩である。成田層群の中の比較的堅く締まった部分を切り出したものであろう。ただし、移植ごてで簡単に削れる程度の硬度である。本石材の名称については報告者により、凝灰質泥岩とか凝灰質砂岩とも呼んでおり、石材名称について統一する必要がある石材であるが、本書においては通常使われている軟質砂岩という呼称を用いる。なお、本石室に使われている石材の表面には、海岸に見られる岩と同様に無数の円筒形の穴が空いている。

石室平面形態 確認できた部分の平面形態から考えて、この横穴式石室は前室と後室に分かれる複室構造のものである。Aトレンチの土層断面からみると、内側周溝から一段上がった所に開口していたようである。この開口部分を何と呼ぶかが問題である。つまり、平面図下方の門柱石によって仕切られたその下の部分である。側壁はこの平面図最下部で完全に終了しており、ここで内側周溝に向かって開口していたのは確実である。通常であればこの部分は羨道と呼ぶのであるが、墳丘盛土の傾斜を考えると、この部分には天井石が架けられていなかった可能性も考えられる。その場合、この部分は羨道部ではなく前庭部と呼ぶ方が妥当ということになり、やや変則的な複室構造ということになる。平面図上方の墳丘部分に隠れ込む付近から奥では天井石が残っている。平面図におけるその手前の部分は側壁最上段の石材、そしてさらにその手前は上から2段目の側壁の石材が見えているのである。ポーリング・ステッキを奥壁方向にさしこんだところ、最奥部の天井石の前面から測ってさらに0.70mほど奥のところで、奥壁に突き当たった。これらの側壁や天井の石材から判断すると、それぞれの石材は断面がほぼ正方形で0.75mを中心に前後10cm程度の範囲におさまり、長さは1.00mから1.30mの範囲におさまる規格性をもったもののようである。



第4図 横穴式石室実測図

石室断面 石室全体の確認面である天井石を除く上から2段目の側壁材上面に当たる部分から、石室内覆土にボーリング・ステッキをさしこんでみると、前・後室ともに0.4から0.5mの深さのところで、砂のような手ごたえの層に突き当たる。天井材の崩落層である可能性が高いが、発掘調査を行わなかったので床面がこれよりも下に行くかどうかは不明である。

前庭部は、確認面でボーリング・ステッキをさしこんだところ、1mのステッキでは底面に達することができなかった。トレンチの土層断面で確認できた裏込めの掘り込みの深さが0.75m程度であったから、盗掘などの攪乱が入っている可能性もある。このこととAトレンチの土層断面図の状況とを併せて考えると、本横穴式石室は内側周溝から一段上がったところに前庭部底面があったようである。しかし、玄室床面と前庭部底面との間に段差があったかどうかは不明である。

なお、確認面での石室内の幅は奥に向かうに従って狭まっている。確認面は奥壁方向に行くに従ってやや高くなっており、計測部位が1段目の石か2段目の石による違いである可能性が高いようである。つまり、側壁が天井に向かって持ち送りされている結果と考えてよいだろう。

計測値 今回の調査によって得られた各部位における石室内の計測値は以下のようになる。前庭部前縁から奥壁面までの石室内法全長：約7.15m～7.35m、前庭部長：1.50m～1.70m、前室長：2.35m～2.50m、後室長：約2.00m～2.20m、前庭部幅：1.10m、玄門部幅（門柱石部分）：0.60m、前室部幅：0.80m～0.90m、前・後室境目幅（柱石部分）：0.50m、後室部幅：0.50m～0.70m。

なお、以上の数値はすべて今回の調査における確認面－天井石を除く上から二段目の側壁の上面を中心とした面－での計測値であることを、再度注記しておく。

※ 9ページから15ページまでの土層断面について ※

各トレンチの土層断面については、図面の縮尺の関係で煩雑になってしまうのと同時に、堆積状況がかなり単純で、かつほぼ共通的な様相を呈しているののでここで説明しておく。

図中スクリーン・トーンで示した層は各周溝共通の黒色土層である。層の厚さには若干のばらつきが見られるが、全体に混和物の少ない良好な黒色土である。断面最上層は現在の表土層で、この層と黒色土層の間には一・二層の暗褐色土層が堆積している。黒色土層から周溝底までの間の層は暗褐色土かロームを多く含む褐色土の層である。

なお、平面図、断面図ともに上方に墳丘がくるように配置した。

2. 周溝及び竪穴住居等

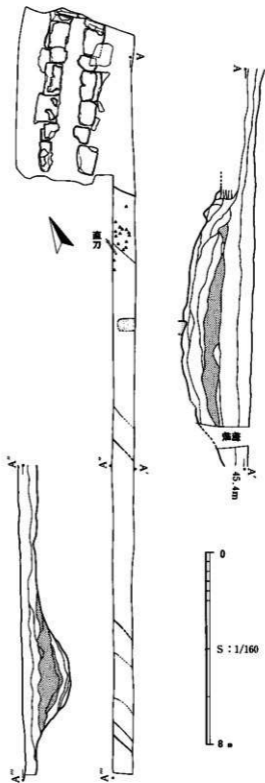
Aトレンチ (第5図、図版5)

古墳南西側の見かけ上のくびれ部から、やや前部寄り設置したトレンチである。

内側の周溝は上端で幅10.8m、下端で幅6.8m、確認面から溝底までの深さは2.3mである。ただし、平面図からもわかるとおり、このトレンチは後円部側の曲線的な周溝部分に当たっており、それに対してトレンチは斜めにかかっている。従って、見た目の幅はかなり広いものになっているが、実態としては上端幅で7.6m、下端幅で4.8m程度であろうと考えられる。周溝底からは、閉塞石かと考えられる軟質砂岩塊が検出されている。また、周溝内側斜面下方及び底面付近からは直刀一振、鉄鏃、金銅製の榎金具が検出されている(直刀以外は図中▲で表記)。以上のことから考えて、横穴式石室は閉塞石をはずされて、中が荒らされている可能性が高い。

外側の周溝は内側の周溝から7.4mほど離れて検出されたが、これも見かけ上の距離であって、実際は5.2mほどの間隔であったと考えられる。上端幅は4.8m、下端幅は2.0mであるがこれも見かけ上の数値で、実態は上端幅3.4m、下端幅1.5mと考えられる。確認面から溝底までの深さは1.4mである。

墳丘際の拡張部分については横穴式石室の部分での記述のとおりである。



第5図 Aトレンチ実測図

Bトレンチ (第6図、図版5)

古墳南側の前方部中央で古墳主軸線にほぼ直交するように設定したトレンチである。

内側周溝の墳丘側テラス部分(本来の墳丘下で、この部分の墳丘は後世に削平されている)で、竪穴住居跡SI 2が検出された。この住居は古墳築造以前のものでかなりの部分を古墳の内側周溝によって破壊されている。住居の痕跡としては壁の一部と床面が検出できた。スクリーン・トーンで表示した部分の床面では焼土の堆積層が確認できた。

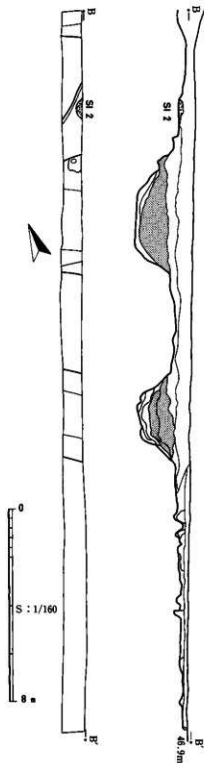
本トレンチのさらに墳丘寄りの起点部分に若干の掘り込みが確認されているが、これについては性格不明である。

内側周溝は上端幅5.0m、下端幅2.5mで確認面から溝底までの深さは1.5mである。墳丘側の周溝下り口に上端径0.6m、下端径0.16m、深さ0.7mの柱穴状の掘り込みがあるが、竪穴住居に伴うものなのか、それ以外のものであるのかは判別できなかった。

外側周溝は、内側周溝から4mほどの距離をあけて設けられている。上端幅は3.5m、下端幅は1.7m、確認面から溝底までの深さは1.6mである。

本トレンチにおいて外側周溝からさらに外側に向けて12mあまり調査しているが、第3周溝は確認できなかった。このことから考えても、本古墳の周溝は二重であると断定して良いだろう。

内側周溝と外側周溝との計測値はほぼ実態どおりである。



第6図 Bトレンチ実測図

Cトレンチ (第7図、図版6)

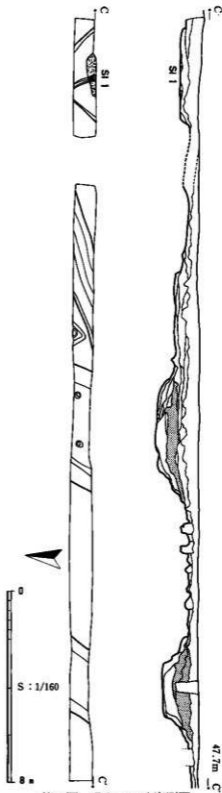
墳丘西側の前方部コーナー部分を検出するために設定したトレンチである。あとわずかに南側に振ることによって周溝のコーナーを検出することができたようである。しかし、このすぐ南側から植林域に入ってしまうために、所期の目的を達成することはできなかった。

トレンチ内現墳丘際のテラス状の部分(やはり本来の墳丘下で、墳丘は後世において削平されている)で、竪穴住居跡SI 1が検出されている。二方向の壁と床面が確認され、床面には焼土層も確認できた。焼土層下の床面からは柱穴状の掘り込みが見付かっている。

SI 1と内側周溝との間に斜めに走っている細い溝は、根切り溝の可能性が高いと考えられる。この根切り溝と内側周溝との間に、方形と考えられる深さ0.5mほどの掘り込みが検出されている。性格は不明であるが、覆土中から土師器片が多く出土している。

内側周溝は見かけの上端幅が5.0m、下端幅が3.3mである。これも周溝に対してトレンチが斜めに入っているので、実態数値は上端幅が4.5m、下端幅が2.9mと考えられる。確認面から溝底までの深さは1.3mである。溝底で柱穴状の掘り込みが2か所確認できた。墳丘寄りのものは径0.24m、深さ0.79mで、外寄りのものは径0.23m、深さ0.85mである。覆土は周溝最下部のものに似通っており、周溝構築段階のものとみて間違いないだろう。

外側周溝は見かけの上端幅が3.1m、下端幅が2.0mで、実態は上端幅が2.7m、下端幅が1.8m、確認面からの深さが1.1mである。周溝の間隔は実態で6m前後と考えられる。



第7図 Cトレンチ実測図

Dトレンチ（第8図、図版6）

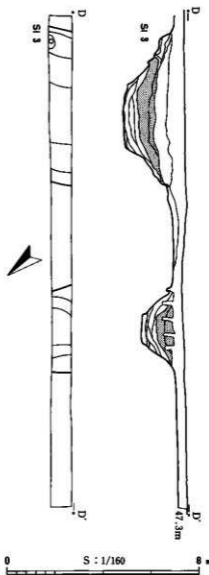
墳丘北西側の前方部主軸線延長上に設定したトレンチである。調査段階において荒蕪地、及び畑地であったおかげで、今回設定したトレンチのうち、唯一制約を受けずに調査することができたトレンチである。

墳丘寄りのテラス部分（やはり後世において墳丘が削平されている部分）で、竪穴住居の壁と床面と考えられる部分が検出された。SI 3である。この遺構は他の2軒の竪穴住居とは異なり、土層断面図中の黒色土層上面に床の痕跡らしい部分があり、古墳築造以後のものである可能性が高い。柱穴らしいものも確認されており、径が0.6mで深さが0.75mである。この付近の上層覆土中から青磁片が1片検出されているが、本遺構に共伴するかどうかは即断できず、本遺構の時期は断定できない。しかし、前方部の墳丘が部分的に削平された後に構築された住居であると考えられるので、本住居の時期が決定できれば、この部分の墳丘の削平時期の下限は設定できることになる。確定できる遺物がほかにないことが残念である。

古墳の内側周溝は、上端幅が5.2m、下端幅が2.3m、確認面から溝底までの深さは1.9mである。

外側周溝は、上端幅が約3.5mで、下端幅が約1.4m、確認面から溝底までの深さは1.35mである。

内側周溝と外側周溝との間隔は4.3mである。墳丘主軸線の延長上に設けたトレンチであるので、実態も同じ数値である。



第8図 Dトレンチ実測図

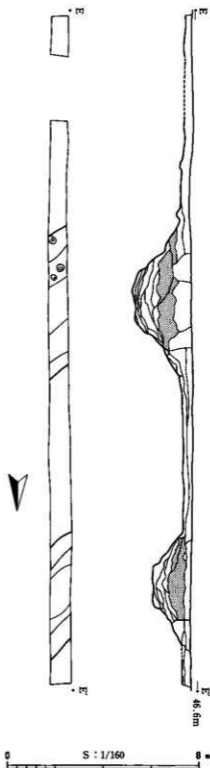
Eトレンチ (第9図、図版7)

墳丘北側の、前方部コーナー部分を検出するために設定したトレンチである。しかし、調査経過の項で述べたような事情により、本来設定しようとしていたところから西寄りの部分に設定しなおしたために、コーナーを検出することができなかった。第17図で示した本トレンチ東側の周溝コーナーは、ボーリング・ステッキ調査によって導き出したコーナーである。この調査によって周溝とそれ以外の所とで土質に明確な違いを見出せたので、ほぼ間違いないものと考えられる。

内側周溝は、見かけ上で上端幅が5.9m、下端幅が1.9mであるが、やはり周溝に対してトレンチが斜めに設定されているために、実態で上端幅が4.0m、下端幅が1.3m、確認面から溝底までの深さが1.9mである。周溝の墳丘側斜面に3個の柱穴状の掘り込みを確認することができた。墳丘寄りのものから記述すると、第1の掘り込みが長径0.4m、短径0.2m、深さ0.4m、次のものが径0.3m、深さ0.67m、最後のものが径0.2m、深さ0.48mである。これらの掘り込みはCトレンチのように周溝底面に掘り込まれているものと異なるために、はたして同じ性格のものかどうかは、今の段階では判断できない。

外側周溝は見かけ上で上端幅4.7m、下端幅1.6mで、実態は上端幅3.1m、下端幅1.2mとなり、確認面から溝底までの深さは1.2mである。

外側周溝と内側周溝との間隔は、見かけ上で7mあるが実態で4.8mと考えられる。



第9図 Eトレンチ実測図

Fトレンチ (第10図、図版7)

墳丘北東側のくびれ部付近に設定したトレンチである。AからEまでの5本のトレンチと異なり、現墳丘と内側周溝との間の距離が短く、この付近では墳丘はあまり削平されていないことがわかる。内側周溝部分では植林されている杉の樹根が大きく張っているために、外側の下端と上端を明瞭にすることができなかった。また、谷が北東側に迫っているために、全体に墳丘から谷に向かって緩く傾斜している。

内側周溝は現墳丘の裾線から2.8mほど離れたところから掘り方が始まっている。見かけ上で上端幅約6.9m、下端幅約3.9mで、実態は上端幅約6.6m、下端幅約3.6mとなり、確認面から溝底までの深さは1.6mから1.8mである。墳丘側下端部分に長径0.4m、短径0.3m、深さ0.26mの柱穴状の掘り込みがある。C・Eトレンチで検出されているものに比べて浅く、同質のものであるかどうかはわからない。

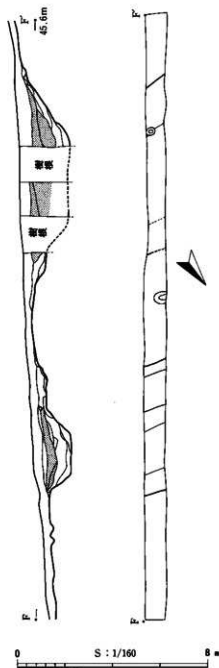
内側周溝と外側周溝の間には楕円形の掘り込みが検出されている。一部分がかかっただけで、短径0.5m、深さ0.26mである。性格は不明である。

外側周溝は見かけ上で上端幅5.3m、下端幅1.8mで、実態は上端幅5.0m、下端幅1.6m、確認面から溝底までの深さは0.9mである。周溝の間隔は見かけ上で4.6m、実態で4.2mである。

Gトレンチ (第11図、図版7・8)

墳丘北東側の後円部中央付近にほぼ直交するように設定したトレンチである。トレンチの北東端は谷の傾斜変換線が間近に迫っており、Fトレンチと同様に全体に北東側の谷に向かって緩く傾斜している。

内側周溝は現墳丘裾線から0.7mほど離れた地点で掘り方が始まっている。やはりこの付近では墳丘がほとんど削平を受けていないと考えられる。掘り方は上端幅が5.9m、下端幅が3.3m



第10図 Fトレンチ実測図

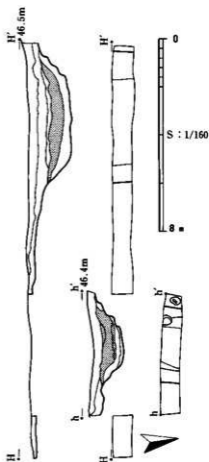
で、確認面から溝底までの深さが1.0から1.4mである。溝底に2個、外側傾斜面に1個の柱穴状の掘り方が検出された。墳丘側のものから順に計測値を示すと、最初のが長径0.4m、短径0.3m、深さ0.38m、次のものが長径0.3m、深さ0.42m、最後のものが長径0.25m、短径0.2m、深さ0.2mである。溝底の2個の掘り込みについては、掘り込み方がやや浅いものの覆土が周溝底部付近の覆土と同じであり、Cトレンチで検出されたものと比較した場合、同質のものと考えてほぼまちがいないと考えられる。傾斜面のものについては同質のものか否か即断できない。外側周溝の墳丘側上端は、根切り溝と考えられる溝によって一部が破壊されている。上端幅が3.6m、下端幅が2.0mで、確認面から溝底までの深さは、0.5mから1.1mである。溝底には内側周溝底のものと同様の柱穴状の掘り込みがかかっている。径0.35m、深さ0.4mである。外側周溝のさらに外側に、弱い落ち込みの線が見えるが、性格は不明である。

Hトレンチ（第11図、図版8）

後円部の墳丘東側に設定したトレンチである。植林のために、トレンチの位置を一部変更して調査した。このトレンチでは、内側周溝は現墳丘裾直下から掘り方が始まっており、墳丘の遺存状態はこの付近が最も良いものと考えられる。これは墳丘の等高線図の等高線間隔がなだらかで、きれいなことから理解できる。

内側周溝は上端幅5.4m、下端幅3.5m、確認面から溝底までの深さ1.3mである。

外側周溝は上端幅3.2m、下端幅1.6m、確認面から溝底までの深さ1.3mである。墳丘側の掘り方上端付近に長径0.5m、短径0.3m、深さ0.32mの小さな掘り込みがある。また、墳丘側掘り方傾斜部分には径0.4m、深さ0.27mの小さな掘り込みが検出されている。これらの掘り込みは、他のトレンチで周溝底面に見付かっている柱穴様の掘り込みと同質のものかどうかはわからない。



第11図 G・Hトレンチ実測図

IV 遺物

1. Aトレンチ内側周溝出土の金属製品（第12・13図、巻頭図版2、図版9・10）

1から59までの金属製品は、すべてAトレンチ内側周溝の墳丘寄りの溝底付近から検出されたものである。いつの段階であるかはわからないが、副葬品として石室内にあったものが、取り出されて放置されたものと考えられる。

1は金銅製鍔金具である。銅地に鍍金が施されている。座金は半分程度欠失しているために、円形なのか半円形なのかはわからない。鞍本体へのさし込み部分には木質が全面に付着している。X線写真から見ると、さし込み部分は断面長方形の釘状になっていたようであり、わずかに地金が見えるところにも金色の部分が見え、すべての面に鍍金が施されていた可能性が高い。付着木質は図示したようにさし込み部分と平行に木目が走っており、層木にさしまれていた可能性が高い。刺鉄の装着痕跡はあるが、脱落しており検出されなかった。

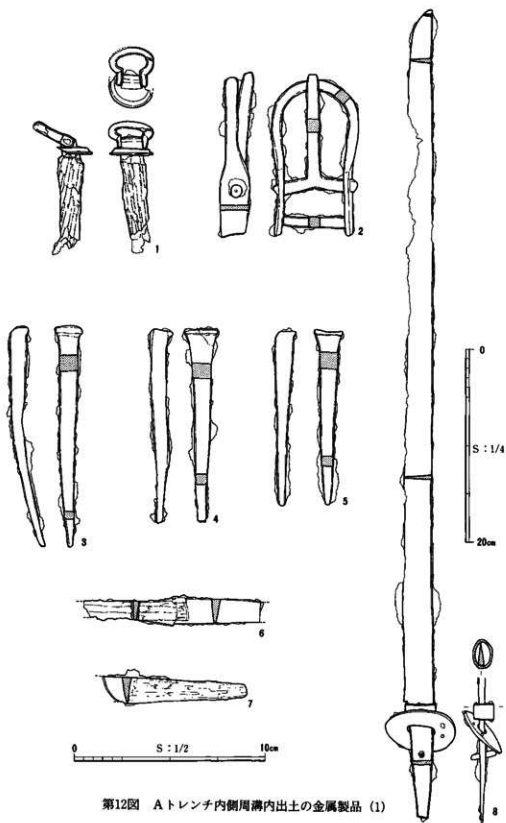
2は鉄製の鞍具である。馬具の革帯に使用されたものであろう。刺鉄を横軸に巻き付けて装着する形式のものではなく、横軸と一体で形成して本体に接続する形式のものである。

3から5は鉄釘である。角釘で、頭は一方にのみ叩き出して平坦部分を作り出している。図化できるほどではないが、一部にわずかに木質が遺存している部分が見える。推測でしかないが、木棺に用いられたものである可能性が高いと考えられる。

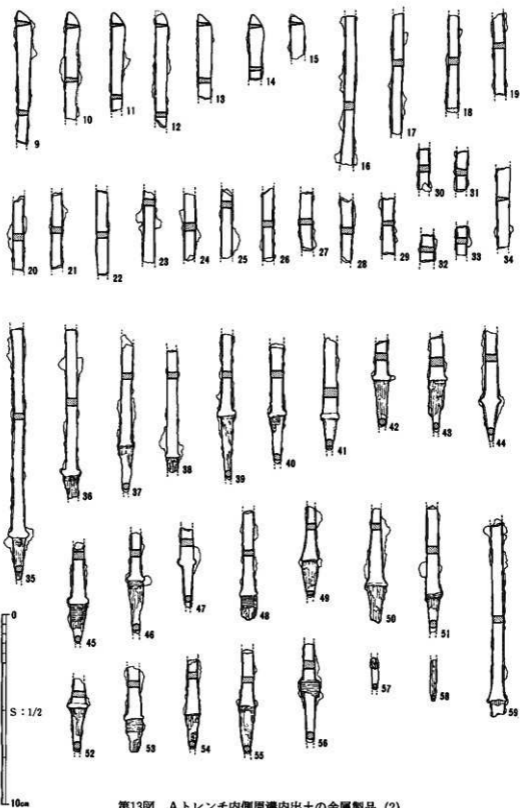
6・7は鉄製の刀子である。双方ともに柄の部分の木質が遺存している。6は右側が刃部で刃先部分は欠失している。関と思われる部分はX線写真にも写っておらず、無関と考えられる。柄の右端の部分は銚の形どおりに遺存している。柄部分も先端付近を欠失している。7は左側が刃部でそのほとんどを欠失している。実測図中の断面を表した部分のすぐ左側の下部に弱い関が見える。柄部分茎の鉄本体はほぼ全体が残っているようである。

8は鉄製の直刀である。刃部に木質が見えないことから考えて、抜き身の状態であった可能性が高いが、石室内に副葬された段階で既に抜き身となっていたのか、それとも石室から取り出されて周溝内に放置された段階で抜き身となったのかは不明である。全長84cm、刃渡り71.5cm、柄の長さは12.5cmで、刃の側に関がある。倒卵形の二孔を有する鐔と、銚、目釘が遺存している。鐔の孔は円形で径は5mm前後、棟側中央付近に並んであけられている。

9から59は鉄鍔である。9から15までが箭先で、すべて無関片刃の形態である。16から34までは頸部である。34のみが断面三角となっておりやや異なる形態のものである。35から59は頸部から棘及び茎にかけての資料である。棘は両側辺に四角く小さく突出する形態のものと、X線写真からみても段差程度にしか見えないものとの二種類がある。資料のほとんどは片刃無関の細根系長頸鍔と考えると良いだろう。



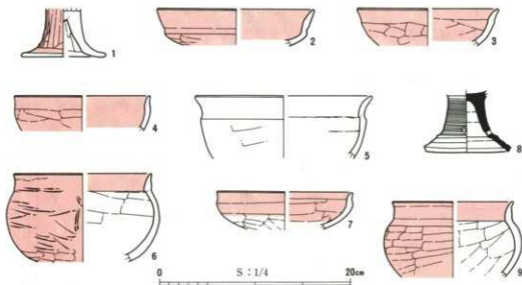
第12図 Aトレンチ内側周溝内出土の金属製品 (1)



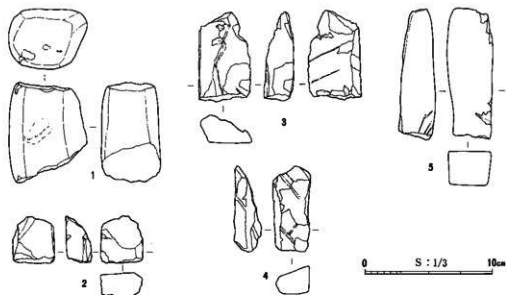
第13図 Aトレンチ内側周溝内出土の金属製品 (2)

2. 土器 (第14図、図版11)

1から5はBトレンチ出土資料である。1は土師器高杯脚である。器表外面には赤彩が施されている。器表内面は乳橙色、器内は黒灰色から乳赤色である。混和物は少なく焼成は良い。開脚端部は内外面ともに横方向のナデである。2は土師器杯である。残存率は15%程度で、復原実測である。器表面は内外全面に赤彩が施されており、器内は乳橙色で、酸化鉄粒・石英粒などを普通量含み、焼成は良い。外面後円部から内面全体はナデ調整である。3は土師器杯である。器表面は全面赤彩で、器内は乳橙色である。酸化鉄粒・石英粒を普通量含み、焼成は良い。4は土師器杯である。器表全面に赤彩が施されており、器内は乳橙色から橙褐色である。石英粒をわずかに含み、焼成は良い。5は土師器碗である。色調は黒褐色から赤橙色で、部位によって異なる。酸化鉄粒・石英粒を普通量含み、焼成は良いが器表外面は荒れている。6はSI 1出土の土師器碗である。外面全面から内面口縁部にかけて赤彩が施されている。外面下半部は素地が黒色、内面器表は橙褐色で、器内は乳橙色である。石英粒を普通量含み、焼成は良い。7はCトレンチ出土の土師器杯である。内外面ともに器表上半に赤彩が施されている。下半は器表面が黒色、器内が乳橙色である。焼成は良い。8はDトレンチ出土の須恵器高杯脚である。色調は青灰色で、外面に一部灰白色の自然釉が掛かっている。石英粒をわずかに含み、焼成は良好である。脚部下方には三方に円形透かしがあいている。9はDトレンチ出土の土師器碗である。外面から内面口縁部にかけて赤彩が施されている。内面器表は明るい褐色で、器内は乳橙色である。酸化鉄粒・石英粒などをやや多めに含み、焼成は良い。



第14図 土器



第15図 石製品

3. そのほかの遺物

石製品 (第15図、図版11)

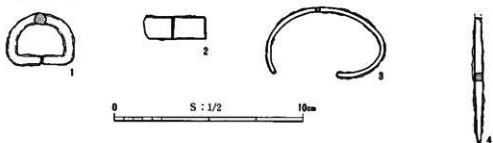
1はC・Dトレンチ間での表採品である。砂岩の叩き石で、表面全面に被熱痕がある。2から5は凝灰岩の砥石である。2・3はCトレンチ出土、4はDトレンチ出土、5はGトレンチ出土である。

鉄製品 (第16図)

1は半円形の環状で、直線部中央につなぎ部分がある。用途・時期は不明である。2は鋳造品で板状の製品である。3は細い棒状のものを環状にしたもので、用途・時期はやはり不明である。4は角釘と考えられる。いずれも用途不明で、古墳時代より後の所産と思われる。

磁器・陶器・亀甲製品 (図版11)

実測図はないが、1は青磁片で外面に鑄連辨が見える。2は鉄絵の志野の椀である。3は亀甲製の管である。



第16図 鉄製品

V ま と め

1. 墳丘と周溝

第17図は調査結果から復元した墳丘及び周溝の想定図である。二重にめぐる周溝は墳丘相似形の前方後円形で間違いないものとする。各部位での想定復元数値は以下のようになる。

(墳丘) 主軸長：86m、後円部直径：43m、くびれ部幅：17m、前方部先端幅：49m、
後円部比高：7.8m（現状値）、前方部比高：5.7m（現状値）

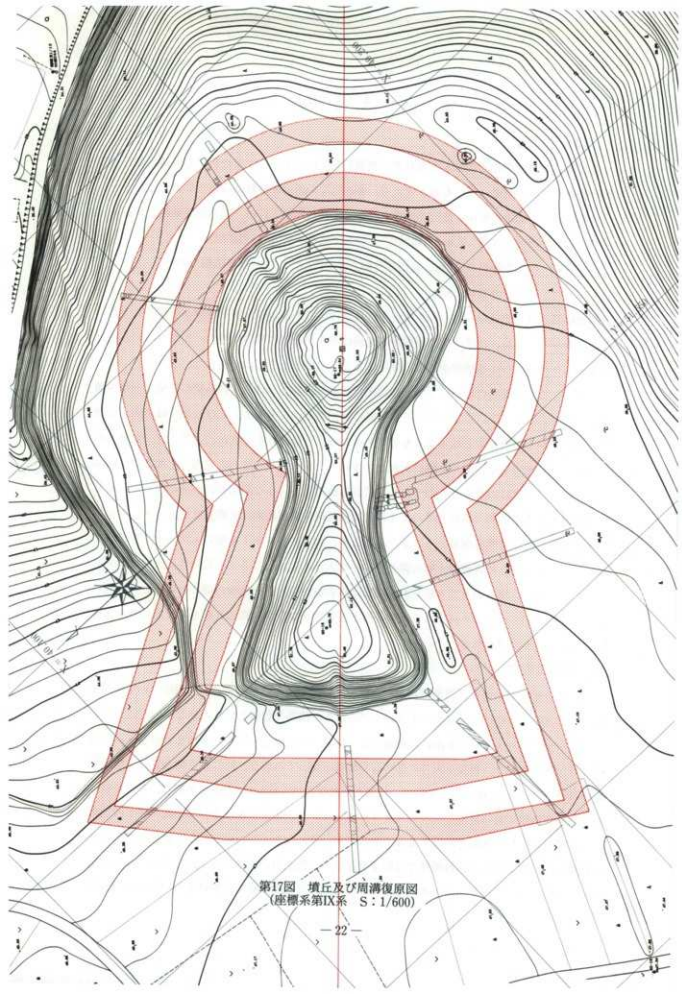
(周溝) 外端主軸長：113m、後円部外端直径：72m、くびれ部外端幅：49m、
前方部外端幅：80m

調査以前の墳丘測量から得られた墳丘主軸長は79mであるから、削平部分が予想外に大きいことがわかる。なお、北側の前方部側線の周溝は明らかに現地形の崖線内にかかっているが、地元の人々の話からこの地形が後世の削平によるものであることがわかった。

ただし、この復元図には、いくつかの問題点がある。ひとつは横穴式石室が完全に内側周溝内にかかっていることである。周溝の曲がり方から考えて、くびれ部分は実際には接続する形態がこの復元案とは異なるものであったらと思うられる。次に前方部先端の両隅の形態に関する問題である。前方部側に入れた3本のトレンチのそれぞれの周溝の上端の線を結ぶと、どうしても直線にならないのである。これは復元したような隅切りの形態になるか、もしくは河内大塚山古墳や今城塚古墳のように前方部先端中央部に向けて剣菱状に尖るか、のいずれかの形態である可能性が考えられる。もちろん、調査はわずか1m幅のトレンチで行われており、その中のどこに周溝の上端の線を引くかで大きく変わってしまう危険性は十分に承知している。しかし、現在のところ松尾町大堤権現塚古墳や富津市三条塚古墳においても、今回の復元に近い隅切りが想定されている。剣菱形も否定できないが、隅切り形もあながち無理な復元ではないように思われる。

2. 横穴式石室

横穴式石室の現状値及び復元値は事実記載の部分で記した通りである。問題は、石室床面を検出していないために、床面から天井面までの高さが確実な数値として出せなかったことである。ボーリング・ステッキを用いた確認では、床面（らしき部分）から天井までの高さは1m強という数値になり、かなり天井の低い石室構造となってしまう。同じ複室構造を持つ横芝町矩塚古墳では1.5m前後の高さを持ち、成東町不動塚古墳では2.1mの高さがあり、これらと比較した場合極端に低い数値となってしまう。ボーリング・ステッキによって確認できた砂地のような層が果たして床面を形成する面であるのか、それとも天井石の崩落などに伴って形成された覆土中の層であるのかは現状では断定できない。覆土中の層であると仮定すると、石室掘り方の裏込め最下面がそのまま床面に近い部位となる可能性が高く、前庭部分で確認面から1



第17図 墳丘及び周溝復原図
(座標系第IX系 S:1/600)

m以上下に床面があると予想された数値に近くなり、前庭から前室にかけての段差を想定しない方がよいのかも知れない。その場合、予想される床面から天井までの高さは1.4m前後となり、塚塚古墳の数値に近いものとなる。

いずれにしても今回の調査結果のみからでは、この件に関しては断定することはできない。

3. 金属製品

胡摩手台16号墳の時期を決定できる遺物は、Aトレンチ内側周溝から出土した一連の金属製品のみである。出土遺物の鉄鏃・直刀・鏃金具・鉸具・刀子の中で、現在編年研究が最も進んでいるのは鉄鏃である。鉄鏃から順に見て行きたい。

鉄鏃

遺物の説明においても記したように、出土した鉄鏃はその大半が無開片刃箭式の細根系の長頸鏃と考えて間違いないようである。刃部成形は切先付近に限られているのがほとんどであるが、かます切先状になっているものはない。鏃は両側辺に小さく四角く突出する形態と、X線写真で観察してもわずかに段差を有する程度にしか見えないものとの二種類である。茎の部分の全容がわかるものは全くないが、比較的遺存状態のよいもので観察してもそれほど長くならず、細く短い形態のものようである。以上の形態から考えると、編年的には6世紀末から7世紀初頭にかけてというのが最も妥当な時期のようである。

直刀

鞘金具、把頭が遺存していないが、鏃に特徴があるのでここで触れておきたい。鏃は鉄製で、棟側に二孔を有する倒卵形のものである。孔は径が5mmから7mmで、心々間で15mmの間隔をおいている。X線写真から観察すると、このほかには孔と考えられるものはあいていないようである。有窓式の鏃ではなく無窓式の鏃に分類されるものである。孔の位置が棟側に偏っていることと、二個しかないということに特徴がある。周辺地域での類例としては、同じ山武町内に所在する新坂1号墳出土資料を挙げることができる。同古墳は墳形を確定することはできなかったが、胡摩手台16号墳と同様に複室構造の横穴式石室を持ち、石室内からはこのほかに金銅装の大刀や雲珠、辻金具、銜などの馬具、それに鉄鏃が検出されている。

東京都埋蔵文化財センターの松崎元樹氏の御教示によると、このような形態の鏃を有する直刀は、東北地方の横穴出土資料に類例が見られるということである。松崎氏に教示していただいた菊地芳朗氏の論文によれば(菊地1993)、福島県白河市観音山横穴群3号横穴出土資料(6世紀後半～7世紀初頭)、宮城県亶理郡亶理町桜小路横穴群18号横穴出土資料(6世紀後半～末葉)、同県仙台市大年寺山横穴群1号横穴出土資料(銀象嵌を有する、6世紀後半～7世紀初頭)、同県志田郡松山町亀井横穴群20号横穴出土資料(6世紀後半)に類例を見ることができる。これらの資料は皆刃欠で、欠の挟り込みが大きいものが大半で、そのうち亀井横穴群出土資料は本古墳出土資料に近似する資料である。いずれにしてもその属する時期は6世紀後半から7世

紀初頭に位置付けられる資料である。

この小孔の機能について、福島雅儀氏は手貫緒を通す穴を想定している（福島1983）。本古墳出土資料を含め、これらの資料には柄頭や柄木を残している資料がないために確実なことは言えないが、裝飾としての窓とは異なり、手貫緒を通す穴という解釈が正しいかどうかは別としても、それに類する機能を有していたことはほぼ間違いないと考えられる。

ここで、注目されるのは武社国造勢力の基盤となる当地域と東北地方とのつながりである。栗田則久氏がかつて指摘したように（栗田・白井他 1992）、福島県浜通り地方から宮城県にかけての横穴・出土遺物及び集落出土の土器と、この武社国造の地域の古墳・出土遺物及び集落出土の土器との間には、いくつかの共通項を見いだすことができるのである。特に浜通り地域には複室構造の横穴と金銅製品との組み合わせという、武社国造地域の古墳に多く見られる組み合わせと非常に良く似た現象が見られる。そのほかに一般集落出土の土師器杯を見ると、小林清隆氏が指摘したように、氏の分類による杯E類は上総・下総の境界付近それも現在の山武地域を中心に多く分布している。この土師器杯はかねてから東北地方の土器との関連性が言われている土器である。さらに今回の発掘調査により、東北地方に多く見られる二孔を有する鐔を持つ直刀が検出された。以上のことから考えて、武社国造の勢力基盤となる当地域と、福島県の浜通り地方・宮城県地方とのつながりはより確実視してもよいのではないだろうか。

これを歴史としていかに解釈するかという点について、栗田氏は中央政権の東北経営に伴うものとして解釈している。つまり、中央政権が海上交通の便を得るこの地域を、東北経営のための進出拠点としたのだという推論である。栗田氏はさらに香取神宮（および鹿島神宮）の存在も、同様の意義をなすものであると想定しておられる。筆者もこの研究の方向性は正しいと考えるが、現状ではまだ材料不足の感がある。今後の資料の蓄積を待ちたい。

4. 山武郡内の後期から終末期にかけての主要古墳

最近、山武町馬戸境1号墳のように、倭鏡を出すような前期古墳の存在も確認されるようになったが、山武郡内で注目されるのはやはり後期以後の古墳群である。武社国造との関連においても、これらの古墳群は以前から取り上げられる機会が多かった。山武郡内は良好な埴輪列を残していたことで有名な横芝町中台古墳群の殿塚・姫塚古墳を初め、古墳時代後期、それも6世紀半ば以降の前方後円墳終末期までに築造された比較的大型の前方後円墳（ここでは60m程度以上のものをいう）がいくつも確認されている。さらにはその後に続く成東町駄ノ塚古墳のような大型の方墳も存在する。

山武郡域の後期・終末期主要古墳一覧を第1表とした。これらのうち埴輪が確認されているのは西ノ台古墳、殿塚古墳、姫塚古墳、朝日ノ岡古墳の4基の前方後円墳である。それ以外の古墳からは現在埴輪が検出されておらず、埴輪祭祀終了以後の築造であることは間違いないと考えられる。これらの古墳は立地の面から考えると次のように4群に分けることができる。

- i) 西ノ台古墳→不動塚古墳→駄ノ塚古墳
- ii) 経僧塚古墳→カブト塚古墳→胡摩手台16号墳
- iii) 殿塚古墳→姫塚古墳→小池大塚古墳→(大塚姫塚古墳)
- iiii) 朝日ノ岡古墳→大堤権現塚古墳

ただし、松尾町大塚古墳群の姫塚古墳については、地理的には iii) のグループに近いものの、谷を挟んで川の対岸にある。また実態も良くわかっていない。果たしてこのように括って良いものかどうか、また築造順序をここにもって来て良いものかどうか大いに疑問である。ここでは全くの作業仮説としてここに置いておく。

さて、この4群全体を見渡した場合、総体としては埴輪祭祀盛期から終末期前方後円墳へ、そして畿内型大型方墳へという綺麗な流れを見ることができるが、各群を個別に見た場合それぞれの中では決して自己完結していないことがわかる。例えば i) のグループで見た場合、一見自己完結型のように見えるが西ノ台古墳と不動塚古墳の間には時期的に見て殿塚古墳、姫塚古墳に相当する時期の古墳が必要である。つまり、「国造本紀」に記された武社国造が実態として成立するのが何時か、という大きな問題があるにせよ、4群総体で見た場合に初めて武社国造の勢力背景の様相が完結するのである。このように考えた場合、埴輪祭祀終了後の最終未段階の前方後円墳が最も問題となるのである。

上記4群のグルーピングが正しいとすれば、各群内のそれ以前の大型前方後円墳もしくは大型方墳で埴輪祭祀が行われていることから考えて、埴輪を持たない大型の前方後円墳が最終未期の前方後円墳であるという推論はまず首肯できるだろう。そのような前提条件に立つと、i) 群では不動塚古墳、ii) 群では胡摩手台16号墳、iii) 群では小池大塚古墳、iiii) 群では大堤権現塚古墳がそれに該当する。これらの古墳の埋葬施設はすべて軟質砂岩切石積の横穴式石室である。小池大塚古墳が単室構造であるほかは複室構造である。設置位置は、大堤権現塚古墳が後円部墳頂付近にくびれ部に向けて設けられている以外は、みなくびれ部付近で墳丘主軸線に直交して築かれている。石室内出土遺物が正式に報告されているものがないために、これ以外の比較材料はない。以上の比較材料からのみ検討してみると、胡摩手台16号墳と不動塚古墳とはほぼ同列に扱える可能性があり、大堤権現塚古墳と小池大塚古墳はその前後にくる可能性が高いようである。その場合、大堤権現塚古墳と小池大塚の前後関係が問題となる。中村恵次氏の論考によれば、小池大塚古墳の単室構造の横穴式石室は、単室構造から複室構造への移行段階のものようである。

そして、同列関係にあるようにみえる胡摩手台16号墳と不動塚古墳の関係を再度詳細にみると、いくつかの相違点があることも確かなのである。まず墳丘についてみると、胡摩手台16号墳が明瞭な鞍部を持つ形態であるのに対して、不動塚古墳は前方部と後円部の高さがほぼ等しく、鞍部は明瞭ではない。また、横穴式石室の開口する水平部位であるが、不動塚古墳がほぼ

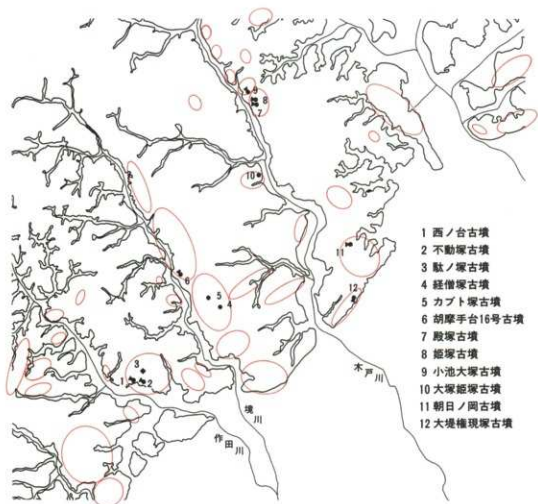
墳丘基底面であるのに対して、胡摩手台16号墳はそれより一段低い位置に開口しているのである。墳形で見ると相違点から考えられる前後関係と、石室の開口する水平位置の相違点から考えられる前後関係とでは、一見矛盾する。この矛盾については、7世紀の方墳に見られる横穴式石室が半地下構造→地下構造へと変遷していくことから考えて、胡摩手台16号墳の方が後出的要素を見せている可能性が高いのではないだろうか。

以上の諸点をまとめてみると、輪軸祭祀終了以後の最終末期の大型前方後円墳は、武社国造の勢力範囲内と考えられるこの地域の4群にそれぞれ1基ずつ存在する。それらは一世代といった期間よりはるかに短い時間差を以て順次築造された可能性が高く、そのうちでも胡摩手台16号墳は最も新しい要素を多く持っているように見える。その築造時期については鉄鍬や鉄刀に対して付与される年代のうちの7世紀初頭と考えると良いように思える。最終末の前方後円墳の築造時期については、6世紀末と考えるのが一般的で、7世紀初頭はそれよりも一時期遅れた時期ということになる。

最終的に、武社国造勢力が律令期にむけてどのように変容するのが大きな問題である。当該地域の後期から終末期にかけての主要古墳の変遷を見るかぎりにおいては、武社国造の勢力は、杉山晋作氏が印波国造勢力の復原において想定したのと同様の(杉山1982)、連合的な形態をとっていたと考えるのが妥当であろうと思われる。その場合、律令期において郡司層へと取り込まれていくことを前提に考えると、先の4群のうちのどれかの勢力が最終的に中心的勢力として残るのか、それとももっと複雑な変容を見せるのだろうか。7世紀における中央政権と在地勢力との政治構造の変容の復原は、武社国造勢力域のような小地域における微視的な復原の積み重ねによって、初めて解明できる問題である。だが、現在のように大型方墳の歌ノ塚古墳と大型円墳の大塚姫塚古墳の先後関係が明確になっておらず、また、郡家などの地方官衙遺跡が明確になっていない状況では、これ以上踏み込むことはあまり意味のないことかも知れない。

第1表 山武郡内後期・終末期主要古墳一覧

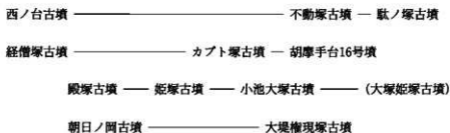
群	古墳名	所在古墳群	墳形	墳丘長	兆域長
i	西ノ台古墳	成東町板附古墳群	前方後円	90m	142m
	不動塚古墳	成東町板附古墳群	前方後円	62m	
	歌ノ塚古墳	成東町板附古墳群	方	60m	
ii	経僧塚古墳	成東町麻生新田古墳群	円	45m	113m
	カブト塚古墳	山武町麻生新田古墳群	円	45m	
iii	胡摩手台16号墳	山武町胡摩手台古墳群	前方後円	86m	113m
	殿塚古墳	横芝町中台古墳群	前方後円	88m	
	姫塚古墳	横芝町中台古墳群	前方後円	59m	
	小池大塚古墳	芝山町船塚古墳群	前方後円	76m	
iiii	大塚姫塚古墳	松尾町大塚古墳群	円	65m	174m
	朝日ノ岡古墳	松尾町蕪木古墳群	前方後円	76m	
	大堤権現塚古墳	松尾町大堤古墳群	前方後円	115m	



第18図 山武郡内後期・終末期主要古墳分布図

周溝形態	埴輪	横穴式石室形態	副葬品
盾形二重	あり	不明	不明
盾形二重か？	なし	複室構造	鉄鉄片、鉄紙片、ガラス小玉
方形	なし	複室構造	金銅製歩揺付雲珠、須恵器
円形二重	あり	形態不明	箱形石棺内 主頭大刀、金銅製鈴他
円形二重	なし	単室構造か？	杏葉、辻金具、鉄鉄他
前方後円形二重 (盾形?)二重	なし	複室構造	大刀、鉄鉄、鞍金具、鉸具
(盾形?)一重	あり	正方形変形複室	頭椎大刀、金銅製鈴、銅鏡、鉄鉄他
盾形一重か？	あり	複室構造	金銅製杏葉、金銅製雲珠、鉄鉄他
円形一重か？	なし	単室構造か？	鉄刀、鉄鉄、須恵器
盾形二重	なし	不明	不明
盾形二重	あり	正方形複室か？	管玉、須恵器
盾形三重	なし	複室構造	頭椎大刀、主頭大刀、鉄鉄他

最後に、第19図として山武郡内の後期・終末期主要古墳の変遷試案を提示してみた。この試案は、調査後長い年月を経ているにもかかわらず未発表のままになっている資料の多い状況下において、筆者が導き出した現段階における暫定的な試案である。これら12基の古墳の中で全く発掘調査経歴を持たない古墳は、大塚姫塚古墳ただ1基のみである。調査から長い時間が経過している未報告資料（または不完全報告資料）が一日も早く世に公表されるようになり、今後より確定的なことが言える時の来ることを望むものである。



第19図 山武郡内の後期・終末期主要古墳変遷試案

〈引用・参考文献〉

- 菊地芳朗 1993 「東北地方における横穴の出現年代」『福島県立博物館紀要』第7号
 栗田則久・白井久美子ほか 1992 『房総考古学ライブラリー6 古墳時代(2)』
 鈿千葉県文化財センター
 小林清隆 1993 「村田川流域の6～7世紀の土師器の再検討」『研究紀要』14
 鈿千葉県文化財センター
 白石太一郎 1992 「関東の後期大型前方後円墳」『国立歴史民俗博物館研究報告』44 第一法規
 ※なお、上書所収の他の全論文も本稿執筆に際して参考とした。
 杉山晋作 1982 「古墳群形成にみる東国の地方組織と構成集団の一例—公津原古墳群とその近隣」『国立歴史民俗博物館研究報告』1 第一法規
 杉山晋作ほか 1991 「成東町西ノ台古墳確認調査報告書」千葉県教育委員会
 千葉県教育委員会 1989 「千葉県重要古墳群測量調査報告書—山武地区古墳群(1)—」
 千葉県教育委員会 1990 「千葉県重要古墳群測量調査報告書—山武地区古墳群(2)—」
 千葉県教育委員会 1991 「千葉県重要古墳群測量調査報告書—山武地区古墳群(3)—」
 千葉県教育委員会 1992 「千葉県重要古墳群測量調査報告書—山武地区古墳群(4)—」
 千葉県教育委員会 1993 「千葉県重要古墳群測量調査報告書—山武地区古墳群(5)—」

- 中村恵次 1978 「房総半島における横穴式石室—とくに複室構造の石室について」『房総古墳論攻』
(再録)
- 沼沢 豊 1990 「千葉」『古墳時代の研究 11 東日本』 雄山閣
- 平岡和夫 1989 「九十九里地域の古墳研究」 山武考古学研究所
- 平岡和夫ほか 1992 「芝山町史 資料編 1 原始・古代(2)」 芝山町
- 福島雅儀 1983 「七軒横穴群」 福島県西白河郡矢吹町刊行会

写真図版



湖沼平台16号墳

湖沼平台16号墳周辺航空写真 (S 6 140,000)



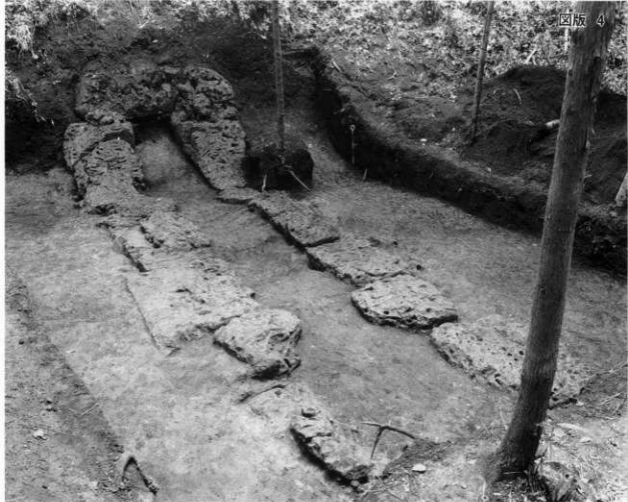
胡摩手台16号墳近景（北東から）

胡摩手台16号墳近景（北西から）





胡摩手台16号墳填丘全景
(南西から)



横穴式石室（西から）

横穴式石室（正面から）

横穴式石室（墳丘上から）





Aトレンチ全景(北東から)



Aトレンチ内側周溝(北から)



Aトレンチ断面(南西から)



Aトレンチ内側周溝(北東から)



Aトレンチ内側周溝底鉄刀出土状況(南から)



Bトレンチ全景(北東から)



Cトレンチ全景 (東から)



Cトレンチ内側周溝底 (奥から)



Cトレンチ外側周溝 (北東から)



Dトレンチ全景 (南側から)



Dトレンチ内側周溝 (東から)



Dトレンチ外側周溝 (東から)





Gトレンチ内側周溝 (北取から)



Gトレンチ外側周溝 (西から)



Hトレンチ外側周溝 (北西から)



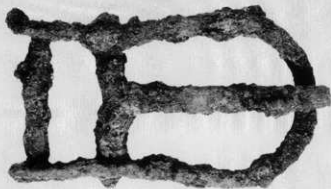
SI 1 (西から)



SI 2 (南東から)



SI 3 (北取から)







報告書抄録

ふりがな	さんぶまちごまでだい16ごうふんはつくつちょうさほうこくしょ
書名	山武町胡摩手台16号墳発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告
シリーズ番号	第272集
編著者名	萩原基一
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター
所在地	〒284 千葉県四街道市鹿渡809-2 TEL.043(422)8811
刊行年	西暦1995年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ごまでだい 胡摩手台 16号墳	さんぶまちごまでだい 山武郡山武町 戸田1,526-2他	405	012	35度 38分 11秒	140度 24分 16秒	1994.10.03 ? 1994.10.31	200㎡	国庫補助 事業による 学術調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
胡摩手台16号墳	古墳	古墳時代	前方後円墳 横穴式石室 二重周溝	鉄刀・鉄鏃・桜金具・校具 刀子・須恵器・土師器	前方後円形の二重周溝が 検出された。 複室構造の横穴式石室が 検出された。

千葉県文化財センター調査報告 第272集
山武町胡摩手台16号墳発掘調査報告書

平成7年3月31日発行

発 行 財団法人 千葉県文化財センター
四街道市鹿渡809番地2号

印 刷 株式会社 正文社
千葉市中央区都町2丁目5番5号

本報告書は、千葉県教育委員会の承認を得て
増刷したものです。